
マリーゴールドガーデン

藤原建武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリーゴールドガーデン

【Nコード】

N6430Y

【作者名】

藤原建武

【あらすじ】

児童養護施設「恵愛園」。親に捨てられた子供たち。飼育する大人たちの、独裁の庭。枯れた理念が育つ。

(前)

一、

母に手を引かれ、くぐった門。

花だんに咲いた、オレンジの花が出迎えた。

同い年の、子供たちの喧騒。砂ぼこり蹴立て。

そこが、楽しい場所だと、

勘違いした。

知らない大人がいた。

体の大きな、眼鏡の男だった。

母は何か話した。男は僕を見て、微笑んだ。

母は僕に、いきかせた。

いうことをきくように、いい子にしているように。

そうすれば。そうすれば？

母の背は、門の外に。

見送る間もなく、僕は男に引き立てられた。

男は和田といった。園長だといっていた。

何人かの大人たちが、名前をいった。全然覚えられなかった。

ここには、何人も子供がいることを教えられた。

みんな今日から友達だ、と教えられた。

ちゃんといいい子にしていれば、お母さんが迎えに来るって。

お母さんが？

よく分からない。

いつも門の外を見ていた。

オレンジの花が揺れていた。
砂ぼこりが、むずがゆい。
ずっとそうしていて、そんなふうに、
時間だけがすぎた。

「遊ばないのかい？」

園長の和田が、僕にそういった。

「お母さんは、いつ来るの？」

園長は微笑んだ。

「いい子にしていればね」

僕はその「いい子」が分からなかった。

母はいつも、僕に「黙れ」といった。

黙っていれば、「いい子」なのだろうか。

僕はずっと黙って、待っていた。

二、

友達とは、言葉をかわさない。

友達は、何もいわない。

友達は友達と話す。

僕は友達と話さない。

僕は、友達

三、

突然殴られた。腹を。悔しかった。

大人が、
僕と、僕を殴ったそいつを引き合わせる。

「殴りなさい」

僕は思いつきり、そいつの腹を殴った。

そいつは大きくて、平気な顔をしていた。

僕は悔しく、何度も殴った。

何度も。全然平気な顔をしていた。

腕が細いのが、悔しかった。

僕はあんなに痛かったのに。

「本当に、そんな殴られたの？」

大人が訝しげにいった。

怖くなって、僕はうなずいて、

そいつを睨むだけで、

そいつは平気な顔して、何もいわないけど、

もう殴らなかつた。

怖かつた。

僕の中に、黒いものが残った。

それが何なのか分からない。

悔しさじゃないことは分かつた。

何かにじっと見られているような。

「嘘つき」

悪いのは僕じゃない。

四、

門の外を見ていた。

「遊ばないのかい？」

園長の和田が、そう微笑みかける。

「お母さんは、いつ来るの？」

園長はにっこりと、

「もう来ないよ」

「どうして？」

「お前は捨てられたんだ」

「どうして？」

「お前は、いらぬ人間なんだよ」

「だから捨てられたんだ」

「お前はゴミなんだ」

「お前はいらぬ人間なんだ」

「だからお母さんは来ない」

「いらぬから」

空のせいじゃなく、すべてが灰色にくすんで見えた。

あの笑顔さえも、つくられたもので。

光のないいくつもの瞳が、

僕を見ていた。

五、

捨てられた

捨てられた

生きている価値

捨てられた

六、

大人たちの中に、園長の息子がいた。

他の大人がいないと、そいつは僕たちをぶった。

そいつはみんなから嫌われていた。

そいつは口から毒を吐く。

「社会のゴミ」

「寄生虫」

その毒は、僕たちの心を殺していく。

「親に捨てられた」

「誰も必要としていない」

「いらぬ人間」

「捨てられた」

「生きている価値」

それが自分にあると思えない。

大人が言うんだから、

そうなのだろう。

僕たちは、いらぬ人間。

七、

嘘とつくりものの中で、

彼女の髪は、鮮やかな金色。
花だんの、今は枯れた、あの花のように、
目に痛かった。

あの花は

「マリーゴールド」

彼女は、なめらかな声で言った。

ガラス玉のような瞳。

青空を透かしたような、かすかな鈍色。

雨上がり、僕を映す。水たまりに映った、昼の時間。

金色の髪が、風に遊ぶ。

灰色の景色の中で、唯一鮮やかだった。

エマ

押し花が好きな、愛らしい少女だった。

エマは笑わない。

誰も笑っていない。

だから不思議じゃない。

僕は笑わない。

けどもし、彼女が笑ったら、

僕も笑えるだろうか。

大人は、笑うたびに毒を吐く。

僕たちは呼吸できない。
大人は口から毒を吐く。
嘲笑う。

見下して笑う。

僕たちがいららない人間だから。

笑うたびに毒を吐く。

笑わなくても毒を吐く。

僕たちは呼吸できない。

笑ったとき、僕の口からも、
毒がもれるのだろうか。

笑わなくてももれるのだろうか。

僕は思わず口をふさいだ。

エマが僕を見る。

「どうしたの？」

僕はこのことを、

教えなければと思った。

「笑うと、毒がもれるんだ。気をつけたほうがいい」

それにエマは、怪訝そうな顔をして、

かすかに微笑んだ、気がした。

甘い香りがした。

僕はエマにいてほしい。

だってきれいだから。

だからエマはいららない人間じゃない。

エマは、僕は、

エマは僕に、

エマはいてほしいだろうか

僕はエマにいてほしい。

エマは僕に、

僕は？

八、

一緒に工作していた。

空き箱を集めて、セロハンテープで
はりつける。

僕はきらきら光る、箱をとった。

僕はその箱が、すごく気に入っていた。

それを、体の大きいあいつが、

僕を突きとばして、

箱をとった。

僕は悔しくて、ハサミを投げつけた。

みんなざわついた。

大人が、僕の腕をつかんだ。

すごく痛かった。腕が、ちぎれる。

「ダメでしょ！」

僕はみんなの目に引き立てられた。

腕が痛い。さっきよりも強く、引きのばされた。

「刃物はオモチャじゃないの！」

大人は、ハサミを開いて、僕の腕にあてた。

「すごく痛いのに！ 人に向けたり、投げちゃダメ！」
刃先が、赤い線が走る。

僕は泣き叫んだ。必死にふりほどこうとした。その手は、食いこ
んで離れない。

痛かった。

痛かった。

「これで分かった？」

光のないいくつもの瞳が、
声をそろえてうなずいた。

九、

悪いのは僕じゃない。

悪いのは僕じゃない。

どうして僕が？

悪いのは僕じゃない。

夢を見る。

人が裂けて死ぬ夢。

嫌な奴、僕を殴った奴、

大人、

赤く裂ける。

死ねばいい。

どうして僕が？

痛い

どうして？

いらぬ人間。

いらぬ人間。

死ねばいい。

どうして僕が

悪いのは僕じゃない

十、

病弱なそいつは、

みんなと同じように走れなくて、

砂場に山をつくって、遊んでいた。

あぶれた僕は、じっとそれを見ていた。

僕は砂で遊ばないが、

そうしているのが、

居心地がよかった。

他のみんなは、必死に走ったり、

何かしている。

運動会。

僕は、足も遅く、体力もないから、

リレーに選ばれない。

友達は、僕と組みたくないから、

僕は一緒に、二人三脚や、何にも出れなかった。

綱引きに、僕はいらぬ。

大縄とびに、僕は足を引っぱるだけ

僕はいらぬ。

僕の組は、僕はいらぬ。

玉入れは楽しかった。

砂の山を見る。そいつは必死に、

トンネルを通そうとしていた。

僕はじっと見ていた。

「何をしているんだ！」

声を荒げながら、

園長の和田が、

砂の山を蹴り崩す。

僕は体が強張った。

園長は、すごい怖い顔をしていた。

「みんなが頑張っているのに、お前らは何をしているんだ！」

「遊ばせるために、見学させているんじゃないんだぞ！」

「この人間のクズ」

睨むでもなく、そいつは

うつむきながら従う。

僕は見ていただけなのに、

どうして怒られなければいけない。

僕は納得がいかなかった。

だけど僕は、すごすごと

従っただけだった。

(中)

十一、

今年も花が咲いた。

マリーゴールド。

花だんに、鮮やかな色のじゅうたん。

「きれいだね」

そうエマに笑いかけた。

エマはじつと僕を見て何も

言わなかった。

花は枯れて、また咲く。

また春になれば、同じ顔を見せる。

僕はいつの間にか、エマの背をぬかした。

僕たちは季節の中で、変わっていく。

十二、

誰かが誰かの物を盗んだとかで、
みんなの前に引き出されていた。

「人の物を盗むのは、この手か！」

園長は怒声をあげて、
木刀でそいつの手を叩いた。
鈍い音がして、そいつは手をおさえて、
うずくまった。

その背中に、園長は木刀を振りおろす。
また鈍い音がした。

「お前は最低の人間だ！」

「お前は人間じゃない！」

「ただのクズだ！」

もう一度振りおろす。

僕たちはそれを、ただ見ている
ことしか、できなかつた。

言うことをきかないと、

一日中立たされることもあつた。

勉強の時間で、先生と呼ばれる
大人にあてられて、
答えられないと、
みんなの前で「私はバカです」
といわされた。

先生は園長や息子の時もあつた。

給食の時間、園長がよくいた。

ニンジンを食べられない奴がいた。
そいつはその日から、
生のニンジンだけになつた。

朝も、昼も、夜は何もない。

次の日、そいつは首輪をつけられて、
四つんばいにさせられた。

目の前のトレイに、ペットフードが入れられた。

「お前は人間じゃない」

「だから犬のエサを食え」

「手を使うな」

「人間語をしゃべるな」

僕たちは、自分のを分けようとも、
助けようともしなかった。

十三、

園長の息子は、仕事がないから
ここにいるらしい。

園長の息子が、「あいつとは

口をきくな」と耳打ちすると、

誰もそいつと口をきかなくなる。

破ると、今度は自分がそうなるから。

それならまだいい。

ひどいと一日中立たされる。

逆らうと、殴られる。

十四、

きれいな服を着ている女の子がいた。
その子は顔もきれいで、
園長の息子に気に入られていた。
でもその子が笑っているのを、
見たことがない。

ある日、その子の服が、
泥の中に捨てられているのを、
見つけられた。

園長の息子が、その子を問いつめた。
その子はエマがやったといった。
うらやましくてやったと。

僕は信じられなかった。
エマは何もいわなかった。

「お前みたいな奴は、
服を着ている必要はない！」
園長の息子は、
エマを裸で立たせた。

裸で立たされる。
なめるような視線
誰もが息をのんだ
困惑と、今起きていることの

それは目の前のことにか。
自分の中に生まれる、
得体の知れない感情にか

僕は、戸惑うことしかできない

エマがそんなことをするわけがない。

だけどその日から、

誰もエマと口をきこうと
しなくなった。

もともとエマは、誰とも話さないけど。

「さびしくないの？」

僕は白々しく聞いた。

「私といた方がいいよ。」

あなたもイジメられるよ？」

僕は友達と話さないので、
気にならなかった。

その日から僕は、

部屋のすみに追いやられて、
眠るようになった。

十五、

神様の話をする大人がきた。
白い、のっぺらぼう。

神様が七日間かけて、
世界をつくった話をした。
最初の人間の話をした。
誰か偉い人の話をした。

僕たちは罪を背負っているらしい。
僕たちは悪いらしい。
だから神様を信じなければ、
地獄におちるらしい。

僕たちは神様に逆らってはいけない。
苦しくても疑ってはいけない。
試練だから。

大人に逆らってはいけない。
大人は偉いから。
感謝しなければいけない。
僕たちは、生かされているから。

考えてはいけない。
疑ってはいけない。
従わなければいけない。

白いのっぺらぼづ。

十六、

押し花、はらりと。
褪せた色、干からびた。

開いた本から、
落ちた。

エマは、しおりがわりに使っていたのか。
それとも、つくって忘れていたのか。

僕はその一輪を、手にとった。

いつからか、
繰り返し見る夢があった。

僕の手を引く手。

大きな、大人の手。

「お母さん」

僕はそう呼ぶ。

ふり返る顔は、無い。

顔をなくした横顔を、
僕は見上げる。

顔のない。

顔がない。

顔をなくしてきたのか。
顔はなかったのか。

夢のあと、僕は鏡を見る。

僕は、

僕の顔は、

これは僕だ。

僕の顔はこんなだったか

こんな？

どんなだったか。

みんなの顔は

僕は起きているのか？

目を合わせない。

みんなの顔は、どんな

押し花、僕は
口づけをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6430y/>

マリーゴールドガーデン

2011年11月26日01時49分発行